

普及啓発講演会 苫小牧会場

■日時・場所	平成 21 年 9 月 26 日（土）	苫小牧市民会館小ホール
■講師	萩中美枝氏（日本口承文芸学会会員）	
■演題	「夫 知里真志保」	

ご紹介をいただきました萩中です。今日は夫の知里真志保の惚気話をしたいということなので、82歳になりましたがお引き受けいたしました。

知里真志保に出会ったのはずいぶん若い頃でしたけれども、真志保さんは私よりも私の父と先に友達になったのです。というのは、戦時中にアイヌのお爺さんやお婆さんからお話を聴いて書き留めておく仕事をしていた人たちというのは、商売をしていたりするなど、多少お金のありそうな家に泊めてもらいながら古老にお話を聴きに行っていました。その頃、真志保さんは北海道大学の講師をしていて「北大の知里です」というのが自己紹介の仕方でした。私は「いちいち北大とつけなくてもいいのに」と思っていて、あまりいい印象はありませんでした。そんなあるとき、父が「知里って『アイヌ神謡集』を出した少女がいるけれどもご親戚ですか」と真志保さんに聞いたんです。そしたらそれまで「北大の知里です」って威張っていたのが、急に相好を崩しまして「えっ、姉をご存知ですか」と言いまして、すっかり父と意気投合して友達になったのです。それからしばらくして真志保さんから結婚の申し込みを受けました。いつもは偉そうな真志保さんが、そのときは言い淀んだような感じで「もしも僕が美枝さんに結婚を申し込んだら、美枝さんは僕を軽蔑しますか」と敬語でゆっくりと話したんですね。そのときは「はい」とも言えず、何て言えればいいのかと思って短く「いいえ」と言いました。それがプロポーズに対する返事でした。そういうわけでプロポーズに対して「はい」ではなくて「いいえ」と答えて結婚したのです。

結婚するまでに真志保さんがくれた手紙、ラブレターはものすごい数でした。今だとメールとか手っ取り早い方法がありますが、その頃は手紙でした。真志保さんは字が上手だったので、私はその達筆さに惚れたのです。でも真志保さんと暮らしている間はずっと先生と生徒のような間柄でした。惚気を言えるようになったのは亡くなってからです。真志保さんはずいぶん厳しい夫でしたが、女性に対する軽蔑感はまったくない人でした。あの時代は男尊女卑というのが普通でしたが、真志保さんは女だからといって差別するようなことはありませんでした。叱られるときは私が悪いのです。ただそれにしても怒る真志保さんも早すぎると思えるくらいに手が早くて、返事する前にぶたれたこともありました。でも不思議なことに、それを不当だと思ったことはありません。私の父が母をぶったこともないし、子供をぶったこともないのだけれども、真志保さんにぶたれるからといって逃げて帰ろうと思うことはありませんでした。

私と結婚したとき、真志保さんには子供が5人いました。子供たちは私の前の前の奥さ

んの子供ですが、後に子供たちが言うには「私たちを生んでくれた母にも、その次の母にも腹を立てると“出て行け””と言っていたようです。だけど私にだけは言ったことがありませんでした。子供たちはよく見えていますよ。子供たちからは、私に出て行けと言ったら「はいわかりました」と言っただけに出て行きそうな感じに見えていたそうです。

真志保さんは女に対して軽蔑の考えはまったく持っていませんでしたので、だからこそ叱られるときも男と同じだったように思います。私はアイヌの世界には男尊女卑はないと思っています。実際にこれまで私がお付き合いしてきたアイヌの女性には男性よりも優れた人がたくさんいます。

真志保さんは昭和36年に亡くなりましたが、NHKで昭和36年4月からアイヌ伝統音楽収集作業という事業が始まって、その録音作業をしていました。真志保さんが監修だったものですから、準備のために前年の11月過ぎからNHKに通うようになりました。真志保さんは心臓に持病があって寒さが駄目なものですから、冬場は家にこもっているのが普通だったのですが、その年はNHKの仕事のために、とても楽しそうに出かけました。それが不思議だと思っていたのですが、それが真志保さんの最後の仕事になりました。4月に辞令はもらっていましたが、ほとんど仕事に手をつけないうちに、2ヶ月ちょっとした6月にNHKの仕事を共にすることなく亡くなりました。真志保さんが私にこの仕事を与えて亡くなったと思って、私の一生の仕事にしております。

私は真志保さんの母親に出会えたことをとても嬉しく思っていますし、母を「お母さん」と呼べたことを誇りに思っています。母はいつも畑仕事をしておりましたので日焼けしていましたが、本来はとても色白な人でした。私は真志保さんが亡くなって萩中の姓に戻ってからもNHKの仕事であちこちに行っていました、母の住んでいた登別の近くまで行くと必ず寄り道しました。そして「うちの真志保さんのお母さんよ」と紹介するのが好きでした。すると母は「うちの美枝さんがお世話になりました」と丁寧に挨拶してくれるのです。それが嬉しくて母のところに連れて行ったものです。真志保さんが亡くなってから、天皇陛下から金一封と感謝状が届きました。私は母に見せたら喜ぶだろうと思って登別に持って行きました。念のため事前に「天皇陛下から金一封が届いたので持って行きます」という手紙を出しておきましたが、行ってみると母は相変わらず畑仕事をしていました。そしてパンパンと作業着の汚れを手で払って家に入り、私があたたまって「これがいただいた感謝状と金一封です」と恭しく差し出したのです。すると母は受け取ってさりげなく炉縁に置きました。その動作を見て「なんと美しい」と思いました。それは本当に恭しすぎず、かといって粗末にするわけでもなし。こういう受け取り方がある、こういう置き方がある、こういう間がある、こういう作法があるということを動作ひとつで母から学びました。そんな母はもらいっ子を何人も育てていました。アイヌでも和人でも分け隔てなく育てていました。何か質問ある方は遠慮なくお願いします。

【来場者】

知里真志保さんが着物を身に着けた写真がありますが、それは萩中美枝さんが撮影し

たと聞いたのですが、そうなんでしょうか。

【萩 中】

真志保さんは、着物を着たことがないのかと思うくらい、いつもすててこのまま畑に出て行くんです。当時、北大には官舎があって、そこに100坪くらいの庭がありました。その庭を官舎の入居者に限って売却するという話があったのですが、真志保さんは「登別に土地も家もあるから札幌に土地はいらない」と言いました。でも私の父が「この場所はいずれ札幌の中心部になるから、買っておいたほうがいい」と言って買ってくれました。そのとき真志保さんは「お前の名義にしておけ」と言ったのですが、私はいいふりこきですから、真志保さんの名義にしました。そして真志保さんが亡くなったときには、そうしたものは一つも貰わずに家を飛び出して、もとの姓の萩中になったんです。

すててこ姿で庭に出て行かれるのが嫌で、着物は全部私が縫いました。その当時“セル”という着物があったのですが、衣替えする6月くらいから着るのがセルです。当時安く売っていましたので、そのセルを買って私が着物を縫いました。私、一応洋裁の資格を持っているんです。真志保さんにベレー帽を作ったら、皆が羨ましがって取られて帰って来るんですよ。するとあるとき真志保さんが「たくさん作っても俺が取られてばかりいて損だから、これからはお金をいただく」と言い出しまして、友達にたくさんベレー帽を作ってお金をいただきました。その頃の真志保さんは、洋服を着るときには必ずと言っていいほどベレー帽をかぶっていたんですが、それらは私が作ったものです。

それから、先日亡くなられた谷本一之さんが主人の最後の弟子だったと思います。音楽がご専門の谷本さんが「自分は言語学を専攻しなくてよかった。もし言語学をやっていたらとっくにクビになっていた」と言っていました。その谷本さんがある時「先生、着物が似合いますね」と言ってくれたんです。それから真志保さんはその着物ばかり着てました。だから亡くなるときにはその着物を着せてやりました。

着物というと、末っ子の娘に琴を習わせていたんですが、その発表会のときに着物を着せてやりたくて、真志保さんに「着物を作ってやりたい」って相談したらものすごく叱られました。それでその年は娘だけが洋服で発表会に出たんです。次の年には真志保さんに相談せずに着物を作ってやりました。そしたらそこに谷本さんが来て「わぁ着物が似合っていて可愛いね」と言ってくれたんです。そしたら真志保さんニコニコして、それから何にも言わなくなりました。谷本さんはお世辞の上手な人だったんですかね。真志保さんって単純なところもあったんですが、女房から見ると可愛くてしかたがなかったですね。怖い先生ではありましたが、そういうところを見ると、18歳も年下の女房であり弟子でもある私でさえも可愛いなと思いました。

真志保さんが最後に入院したとき「金田一先生に自分が入院していることを知らせてやれ」と言うんですよ。悩みましたが真志保さんは私が手紙を書くところを見てるんですよ。だから仕方なく手紙を出しました。すると案の定金田一先生がお見舞金を送ってくれました。私は真志保さんと結婚する前に真志保さんの弟子と結婚しておりまして、

その亭主は嫁の実家から物を貰うことをとても嫌がりました。だから真志保さんも嫌がるだろうと思っていたんですが、真志保さんは「そろそろお前の母親が来る時期じゃないか」とかって言うんですよ。初めは手紙だけでしたが、そのうちに手紙にお金を同封するようになったんですよ。そしたら「宛名が知里真志保様と大きく書いてあるから金は俺のもの。美枝殿と小さく書いてあるから手紙はお前にやる」って言うんですよ。その頃は怖かったですが、今思えば面白かったですね。この機会なので、ほかにご質問などあればお答えします。

【来場者】

ベレー帽はいくらで売っていたんですか。

【萩 中】

当時売られていたベレー帽の半分くらいですかね。そのお金は真志保さんに何も言わずに懐に入れました。

【来場者】

金田一先生と知里先生の間で、アイヌ語またはアイヌ文学に関するトラブルがあったと聞いたことがあります、どのようなトラブルだったのでしょうか。

【萩 中】

真志保さんが『アイヌ語入門』を書いたときに、その中で学問的な意味で恩師のことを批判した。これを単なる悪口と思う人がいたようなのですが、金田一先生はちゃんとわかってらっしゃいました。「知里君だからこういうことを書いてくれるんだ」とおっしゃっていました。本当に不思議な師弟関係で信頼しあっていました。金田一先生は「知里君が僕のことを一番よくわかってくれる」と言っていましたし、知里も「俺のことをちゃんとわかってくれるのは金田一先生だけだ」などと言っていました。その頃の金田一先生というのは既に知名度のあるとても偉い先生だったものですから、知里が金田一先生を尊敬するのはあたり前ですが、その先生に信頼されているなんてなんと羨ましいことだろうと思いました。

【来場者】

萩中先生が知里真志保さんと共に聞き取り調査していたときに、萩中先生がアイヌ語をローマ字で記しているのを知里先生が見て、それがきっかけでNHKの仕事に関わるようになったと聞いたことがあります。

【萩 中】

NHKで昭和36年から伝統音楽収集作業が始まって、知里真志保が監修して事業を進めることになりました。そのスタッフを決めるとき、真志保さんは私を推薦したんです。そのとき「うちの女房はアイヌ語の閉息音を発音できる特殊技能を持っている」と言って売り込んだんです。

アイヌ語は日本語と同じで“誰々が何々をしてどうなった”という語順になり、英語などによりも日本語に近いんです。ただ閉息音というのがあって、その発音はちょっと

難しい。例えば、女の人に対して男の人を“アイヌ”と言いますが、男の人に対して女をのことを“マッ アイヌ”と言います。小さい文字で記される“ッ”をどうやって発音するかといいますと、発音しないのではなく破裂させずに発音するんです。ローマ字表記するとmatとなりますが、アイヌ語には発音するけれども日本語の話し手には聞こえにくい音があります。

それでは、最後にアイヌに伝わる歌を披露して終わりたいと思います。ありがとうございました。